





萬 引

卷 2109
4

是天の与す時節なりと悦び満月丸と議して好根今夜客を迎て酒宴をすを必定客帰りて後已に醉草卧て熟睡を。今宵炎暑の時なりて雨戸を鎖曳むが故に涼風を迎へと欲する更治定たり物音の鎮る爲待て裏の堀と踰忍ひ令糾取れと即合。邸の後門際小室寝殿と内の動靜を窺ひる。好根是哉勢をもあらざる。宵より客を迎て酒宴をかゝ妓婦小琴笛曲を綴せ。纏ひつ舞つきせず。興を添て管侍一色猪客全念哉忘とて盃と画一。客奉勅を手酌笑ひ樂を二更過る頃まで酔ひて黒ハ主客とも涙のまゝ乱醉し。今席は甚うと未客ハ辭を告て。浪滄とて立帰りる。好根侍女赤小盆盤を取させ。席上小醉侍と前後もまことに寝もう。満月丸主従も宵より身とそろびて観へる。二更過る頃まで、男女の笑嬉囂々喧く矣。東大寺の鐘三更と報じて後も寂寥として物音静まり見る。今を室内の音ども皆歎くるやうめいだや思ひ入る。



幕脱捨て帽子の上不王手解け。覺の一刀を帶て身を固め。江守、素手り安ふ内知る
吉主の館外、堀外の松樹を擧上りつ。高堀と乗踰て難うし忍入内す。門ノ前
然開た主と秀へ潜歩して垂敷へ往く。家下の戸へ兩戸をも鎖で好振、背り
て、鳴き鳴いて熟睡ち。満月丸江守と目と見合と完示と苦笑。兩人
其枕頭へ主寄。江守牀を夷くと踏鳴。如何や好根殿眼を覺して笑ひ。家
在ち主、仲九公の脚脇満月丸殿か。脚母若卿公へ貴殿の無体の戀慕を厭
ひ自害して果す。其仇を復す。此年月膽と嘗薪か仗て待く。時未づ
此夜見參らむ吏を得ず。起上で太刀を合まれよと呼ケ。好根此声不驚れて
岸破と剣起太刀掛の太刀を取て腰小帶。是ハ胡乱ある仇呼ノ。若卿ハ我切
害者。小あつむ。何と以て我故自害す。とりやと陳じ。果させど。噫卑恥あるや
され妻す。王ある女君小不義言う。無道人所経綸を無益な。若君疾恨

代報。ドミト。一間も遅てと満月丸。二言の回答す。及まず。刀残内にて斬てくろ
ふと好根大怒り。ほゞ太刀抜合して錯流。三合圍ひあぐ。者も出合よ
狼藉者入る。と叫び。内小江守も太刀を抜。一主を抜けて踏込。斬る
好根ハ強勢の渾あれ。宵の大酒。まざ醒ざ。上不意と伐生て氣吹延。脚
透透た眼定ら。二人の敵と支ふ。己小額と肩尖小疵を負。血涙眼中入る
信眼力瞳あぐ。憤殺して滅多斬小振回。太刀鋒。江守も小脣少一ヶ所の疵
伏受。心も些も屈せ。切進み。此時好根が家士三人。主入。一主入
刀音小目と覺。追取刀かて蒐。署見を主の好根ハ二人の敵と失ふ。成。成。成。
大刀残た。銘く拔連て助太刀。是も。江守斯と。よし。好根ハ満月丸を
立塞て大声。你木手で動きを更かれ。是ハ唐有。仲九公の若君女君。一家
乃仇も。好根と恨み。你木無道の好根と扶。真の主君のか。勢一進。主

と呼れども。家主木好根が新ふ技知る新參者あれど耳も口も三人以下
江守お切てるを。第原太郎怒り。三方お敵と受秘術と尽くして御て互小草
つ切れつ但お薄手重手と肩をす。江守老体の上に數ヶ所の手と肩とも忠義小
凝る太刀鋒刃く己一人を切付。又小重手と肩せれを不叶ふ。思ひを全を
捨てえ来一方逃行す。江守も心懸一とつも。ヨタノ手筋不眼周も席上小仕れ
つ。太刀と杖小端居多是。うち前小満月をハ心ふ女の仇と復さんと大兵の好根と怖
れども鶴鳥のとく傷たて。小太刀をハ好根が肩尖高股左右の脇ホシの手と肩を
あらわすと曲者堪ふ。後の壁へ仆を尾居ふ倒じ坐ると満月透き付今
疊うけて切伏す。遂に首と討取る。江守公前より苦痛と忍て見居す。已小
満月をハ首と上り伏すて大不悦び。噫手柄り更に。今ど母君も妄想と暗し。又
人疾く室置へ歸り。其首を平向て母君の靈と慰め。吉備公の館へ参り入室の禮

従を願ひ父君は對顔。老撫斯敷之所の手と肩を脚供仕りば。夜の明る内
寝くと退くと言置急然と自嘑ハ絶ふ。誠に江守が苦節忠烈再有下れ入
たり。満月丸ハ江守が死と悼み歎け。死骸と隠さき暇もなく。渡わざく其髪髮を切
取て懷中。好根が屍の袖を引裂て首と包み。後門より出ぬを追慕する者も無
リ。後安く室置へ立帰り。稻子兄妹の復仇の始末と語り。若州を靈と余
て好根が首を平向。江守の髪髮と稻子の足を預かる。沐浴して後思ふ旨や有久臍と
刺す血没と絞り。其血を以て一通の文と書記。懷中とて又平城へ赴き多

満月丸呈吉備公血書

江南子母錢之事

却説吉備大臣ハ入唐の用意が整。近々も小啓足せんと其準備とぞ。又
寮の公卿一人の人より餞別の音物を贈る使者。门前小市をか。客殿をハ送り
賓客絶間なく。日く別離の酒宴と催。館の内に賑り。或夜言。備公

未客去りて後夜稍更氣も枕も就かず。入唐の事と思ひでけ。彼金
烏玉兔集。唐帝深く秘藏あるよ。易容得ざる。されど金匱の
入唐と身の大変かど。深く思惟と面する。頃ハ夏の季節を度の
秋草より是彼花咲出た五夜の月影も物哀なる折しも。庭の樹葉より怪
々一八の者立出。吉備公の目前近き庭の面半。身と平伏て拜をす。とぞ
大臣甚ざ異。一幻を覆して。深夜自此庭へ来れ。何者ぞ。狐狸の類の予
哉或心さんもの義や。手足をす。太刀掛け太刀を把て。柄手とけ答め
られ氣は。彼者頭と揚先逸。そをす。我へ變化の類か。是を先
年宣旨ふ。依て入唐。安部仲丸が一子満月と呼き者。又の入唐後
出生。伯父好根と者。又が田守中家族と敗を家督と押領。我
母無体の不義とやうけぬ。母が其と厭ひ。小字と家主ふ。死に落す。を

身ハ操と守り。角害と空くあり。夫丈ト子ハ家士侍女ホリ扶助を受て村落
ふ成人。先頃母の仇伯父好根をす。今以て帰朝致す。此身ハ日影ぞ
成長。朝廷へ絶て又の家と相續仕る。便もなれ。所君不。勅命不。僕て入唐
志す。と承り。何卒脚見添と。入唐隨從を願ひ。度思ひ。とも零落。
身ハ維ふ吹舉と頼ん。余日。百般肝膽と確たよ。厨令の小者と
たう貴賓へ。參る便と得。今夜尊顔と拜へ。方望小子と奴僕とな。乞
唐土。召連れ。又仲介不。對面を。給。生。世の鴻恩。を。涙と。涙
まづく。是。辭退す。が強て席上。叫。今物語れ。題を。か。禰禰内
よ。左と艱難せ。れ。あ。幼若の身。母の仇と復。尚遠く唐土渡。そ
又君と。尋ね。至孝。まぐ。神妙なり。左程才を思ひ。す。孝心。対面。彼

伴ひ十度あれども。奈何せん已ふ入唐の徒者没との奴隸まで。人數を定め悉く
名と記して。撫政殿へ言上されど脚身を曰道せん。吏意ふ。任せどり書信を。一
を父君へ贈られん。予頤りて彼土みて父君不面會せど届け進む。入
唐の義ハ思止られべ。仲九殿存命あらず。如何なる故由あるとも。予門伴として帰朝
し。父子の對面させや。極し。予歸朝するまで。此館ふ居て父子對面の期を待
り。情厚す。仰々るふ。満月を大望と失ひ。傍入唐の脚供ハ叶ひぬまよと
て愁々として頭を低き。稍あく。懷中より一封の書信を取出し。入唐の脚
伴叶ふ。力及ばず。自並入唐不叶。義もあらず。文たゞとも父ふ呈せん
と兼て拙陋文書を書紀置。憚多く。か。又脚對面す。も。足を
届け給り。吉備公の前。吉備公満月たゞ幼若か。其用意の
深れを感心あり。流石仲九子なり。是と。封書と取上灯ふ。照りて見ゆ。小

まさ。ちやか。うち。う。筆。まえ。ぶく。お。まえ。う。ま。む。か。脚。身。浪。く。と
將。手。く。血。沒。を。以。て。表。記。し。れ。だ。甚。ざ。不。審。く。思。れ。満。月。を。不。向。ひ。て。脚。身。浪。く。と
筆。墨。さ。も。意。小。任。せ。さ。う。但。し。思。て。皆。有。て。此。文。を。血。沒。ふ。て。書。れ。と。向。れ。筆。を
満。月。丸。涙。を。浮。め。流。浪。困。窮。の。身。あ。ら。墨。の。才。覺。ハ。左。右。も。右。手。か。く。左。手。か。く。も
心。態。と。血。沒。ふ。て。書。紀。ハ。三。千。余。里。の。波。濤。八。萬。る。と。も。親。子。の。契。リ。汚。せ。ど。も。父。乃
て。手。ふ。渡。い。ゆ。と。思。い。血。沒。を。絞。り。書。い。たり。と。と。答。ぐ。る。吉。備。公。少。て。後。浪。有
実。賢。も。心。付。け。あ。父。子。一。財。の。血。脉。あ。れ。ど。三。千。里。ハ。あ。く。幾。億。万。里。と。薄。る
と。も。父。君。の。手。ふ。渡。り。ん。夷。何。の。疑。ひ。わ。ん。漢。土。江。南。小。青。蚨。と。り。虫。有。て。貯。る
ふ。子。と。生。り。人。其。虫。子。の。血。と。絞。り。取。て。錢。八。十一。錢。小。塗。て。貯。へ。是。を。子。母。錢。と。号。す。と。坐。す。て。虫。母。の。血。を。す
絞。り。取。て。別。の。錢。八。十一。錢。小。塗。て。貯。へ。是。を。子。母。錢。と。号。す。と。坐。す。て。虫。母。の。血。を。す
くる。錢。を。以。て。市。小。出。て。物。を。買。む。其。錢。人。知。ざ。中。小。虫。子。の。血。と。塗。る。錢。乃。許。
へ。起。聞。る。む。これ。を。古。語。ふ。り。子。母。錢。成。而。患。貧。貪。哉。と。謂。り。是。母。子。一。財。乃。

血を慕ひ故なりとぞ。脚身が此血沒の文も彼子母錢の事も必ず仲丸殿の許へ
達矣。噫足下の孝心の深を更此血書と以て推量するべし。仲丸殿小面會
て渡りあそざるを悦びなし。並ども生れ不定させ上の常かて。りて唐主不
て空しく成まつてかどかた。斯ク我より遠く彼土へ渡り命滅をす。不
あらず。仲丸殿ハ脚身の事至孝の子息あるも。予ハハモ一子無れを万
一異域の土とあるも。無縁の幽鬼と成ぬを。されど再會頃より期一ぎ
されど。運ふ叶ひて仲丸殿もヨアモ。馬かく帰朝せむ。其時芽出度又手の
對面させひ。心長閑ふ待れと。レバ懼ふ教訓。其夜より満月を有
リ館ふ寄宿ませられ。

吉備大臣入唐 仲丸靈鬼于吉備公語曰死心條
斯て吉備公万事不外准備綱ひるが參内有て其旨矣聞せられ。

即ち帝より。舍人親王を以て唐帝小曆書と需るの勅書并小聘物。おほけ
ゆき。又金銀絹帛と吉備公へ下され加之あらざ天益とまゝ賜り太上皇よりも
種々の賜と給ひ。吉備公厚く天恩を謝す。脚暇をもつて退出す
遂か天平五年癸酉八月。言都と跋足一肥前唐津へ下。九月中旬小出帆
て大洋小船と支らせる。小日く水追風吹て船の行曳矢の飛がでく。海上少
の障もなく。同年霜月十日明州の港ほど着岸する。夫より吉備大臣へ船と
下促者。小前後と敬言護ませ。車小乘て長安の都へ到られ。然ば唐朝の接
伴使駕々迎。鴻臚館へ緒どる。吉備公旅館乎。一兩日船路乃渡
て休。傍接伴使の引路。小從ひ行裝美く。聘物花麗を飾。唐帝
の宮室へ參内あり。是玄宗皇帝開元二十年癸酉十月廿五日なり。唐帝
帝吉備公と華清宮へ緒ト。左右か文武の大臣と列て對面の事。吉備公

唐帝小拜礼聘物捧げて帝の安射國土の昇平と賀へやされると。玄宗帝譯宣と以て向すら。古より倭國の使者ハ正使副使判官錄事等數人ある。小今般只一人を差越すハ不審なり。抑何のもの使者もあらず。吉備公翁を正し。今般臣吉備日本天子の勅詔を奉ク。遠く貴國（奈良）別の義小はず哉。日本皇帝堯舜の仁德がある。万民を撫恤す。妻母の赤子を慈しむ。如く。德澤八洲の外（アシカイ）及到ね所ナリ。並もいよいよ倭國小曆法あり。民の耕耘する時と過つ夷あらん。帝是代憐ミテ日本風土小適。至る暦書を制衣んと欲して。まつも其據とぞ。余れ書籍なし。傳承ノれを貴國小金鳥玉兔集とく。書有て日月星辰の度數及び天文曆法載どり。史ナリと。依て其玉兔集と湊更借（シテ）まん。臣と入唐させられ所ナリ。彼書籍小本づ。日本小曆法與り。万民耕作の便を得。是貴國の仁德遠く日本まで及の理。あれ。仰て願ひ。其

玉兔集と。息借す。タリ。史を庶幾す。則吾日本皇帝の勅書是小いもて恭く。一宣命と取出。唐帝が捧げられ。玄宗帝把上て一覽。お。宿宣ひ。又ハ日本王黎民の為小曆法と。與えん。朕が國の玉兔集と需らる。吏一應其理有とり。彼書ハ太宗皇帝より代に珍藏。大臣すうと。亡女不見。大臣吏を免ざる秘書あれ。即答。ナ。群臣と高儀。其後有無の返答。ナ。又。ア。それ迄、鴻臚館小滞。尚僕一と仰。多。ナ。吉備公拜辭。松山下脚汗。儀の間。鴻臚館小御。答。待ま。ナ。御。答。歸られる。唐帝より接伴使を以て吉備公を饗食。應。ナ。山海の。酒氣と。帶枕。小。ナ。帳内。入。被の上。小身と横。ナ。五夜十夜を過。酒氣と。帶枕。小。ナ。帳内。入。被の上。小身と横。ナ。五夜十夜を過。程。ナ。旅寐と。あれ。懶た。ナ。小。増て。況や。數千里の波濤。福。唐。

山地あれを睡んとそれども魂眠る見る物皆珍アリ黒國少す易々物鐘
音ア。耳小錫音て愈日も合ざれど。醉の上小起居り。過来一方だ思續け。或仲ナ
生死の程心うとなく彼と想ひ是を念ひキアム折しも何所よりとも知らず吹者
風小灯消人とて再明ふなり其とす一凄美死心地せれ首と面とて四邊と見
灯ふ背て坐する者あり。そも何者かと睡て定めず其姿女ぞアシタハ白刃持
衣と著乱垂する鬢髪の上小冠と頂た。顔色憔悴とて瘦細り眼八星の如口巨不
てきも恐ろアゲ小奇怪の者ナリ。尋常の人あを愴然とて心毛簇く金氣も
大勇の吉備公自若とて些事強む。キモ你ハ何者ぞ。察する小変化の類乎。我
旅労の虚不棄ト障碍を為小未トナリ。知らずテ神國帝王の勅命奉
フ一命と拠つて遠く這國へ渡れり豈妖怪変化の属を怖る者ナシん。疾
くミラゴレとばす。されど其時彼者声を幾一。我ハ敢て妖怪かあらど
こ乞去よと言厲くヤされど其時彼者声を幾一。我ハ敢て妖怪かあらど

今更名告面伏か。見アそ安部仲九が妻仇の亡靈みてひど。語るもいふ惜き
一條ナリ。抑小臣舍人親王の脚撰と出づ預リ元正天皇の勅詔小依て入唐
一。張九龄小就て書經を学び。彼金烏玉兔集を圓せん。吏と望ム。彼
書ハ宝庫小秘置大臣とりども一見まし更叶を。只秘書監の官小居る者而
己朝廷の書籍と預れど。彼秘書とりふを見ること得リ。ナリと云。秘書監
小任せし。又後小玄宗帝の臣下とナリ。十四年の間百辛千苦。漸く秘
書監不任せられて。望ノ玉兔集と圓。一方すの内み暗犯せ。クガ望と足て。唐玄
宗致仕と乞ども敢て許さむ。されど苦むる所藤原清川大伴古志等
入唐せし。清川不頼とて漸く唐帝小仕を致し。清川本と曰。舟にて一旦
出帆せし。天運拙く難風と遭遇。安南國へ漂着。國命難と避て諸島の
戎流浪。辛て再び唐朝へ歸り。歸朝の便を得まと。又玄宗帝小仕小役

臣安禄山とく者。兼て唐の天下を篡奪せんと隠謀を企つれ。我唐帝の左軍
在てハ己^{おの}が邪謀の妨げとなり我^わ。我^わ敗^{ひき}凌雲臺と号する高樓^{タカツ}賸^の食
酒宴樂舞ふ氣と弛ませ。我油斷^{ゆうだん}と勘^{かん}づて衆人悉^{すべ}く樓^{タカツ}下里所^しの控^ひ
我運の尽^{つく}ぬる悲^{しき}。我勢^{ぜい}も是^{これ}とあらず。時後れて控^ひと下ら^りと行^はてんれを
早控^{はやまき}を下^りて翼^{つばさ}を下^りて、下^りて更^{また}能^め。數日水穀^{みずかに}と得^とれを己^{おの}小飢死
小臨^{ちやうりん}。遂^{つい}小舌嘴^{ちくし}切^きて死^死。我存念^{ぞんねん}と達^{たど}き期^{とき}未^まれ^まと^と偕^{とも}斯^か淺^{うき}
書^{しよ}と雷^{らい}りんと入^い唐^{とう}ある人^{ひと}ある。影身^{えいみ}小添^{そぞく}て力を助け玉兎集^{ぎょくとうしゆ}と得^とせんと其^{その}人^{ひと}
待^{まつ}る。小貴卿^{こきけい}渡^{わた}唐^{とう}。我存念^{ぞんねん}と達^{たど}き期^{とき}未^まれ^まと^と偕^{とも}斯^か淺^{うき}
姿^{すがた}と相見^{あむかひ}不^ふ及^{およ}び^なりと。波^{なみ}と俱^{とも}ふど詰^づる。古備公大^{おほ}な残^{のこ}れ^る。備^び貴^き所^しふ^はきる大
難^{なん}少^{すこ}て早^{はや}く幽冥^{ゆうめい}の客^きとなりゆひ^{ゆひ}るや。脚物語^{きわざ}の如^{ごと}く少^{すこ}て^{すこ}きもの辛苦萬勞^{せんくばんろう}
水上の泡^{あわ}と消^き廢^す者の爲^{ため}。自^じ殺^{ころ}あり。悼^{かな}くさよ。倭國^{しづくに}不^ふはざる事^{こと}ゆ^ゆえ

を貴君^{きくん}の死生定^{せい}うゆま^れ。太上天皇臣^{しらそらのひめ}と召^{めしめ}と入^い唐^{とう}。金鳥玉兎集^{ぎょくとうしゆ}と借^{かり}需^す且^よ
仲^{なか}生^う死^うと聞^き。存^{する}命^{めい}を^も舟^{ふな}と歸^き朝^{あさ}せよと勅^{てき}詔^{しめ}。其^のの^をかす
出^で京^{きょう}の砌^き貴^き君^{くん}の賢^{けん}息^{そく}滿月丸殿^{まんげつまるでん}脚^{あし}身^み小^こ身^み逢^あく。入^い唐^{とう}の義^ぎと頼^{たの}み^まひ^まれ^る
も。隨^{とも}往^くの^を人^{ひと}數^{すう}と^と携^{さへ}政^{せい}家^{けい}言^{こと}上^あせ^る後^{あと}れ^るを^を力^{ちから}入^い唐^{とう}の望^{のぞ}を^を止め^ま。予^よが館^{やかた}小^こ寄^よ
宿^{しゆく}を^を置^おり。彼^{かれ}滿月丸殿^{まんげつまるでん}と^と貴^き所^しの入^い唐^{とう}有^あ。後^{あと}て出生^{せいじゆ}アリ。公^{くわ}の内^{うち}君^{きみ}故^{ゆゑ}有^あ
て^て自^じ害^{ころ}レ^る。其^そき如^そ此^この次第^{じだい}たると好^{すき}根^ねが不^ふ義^ぎと^と言^いう^け。若^わ艸^{くさ}ハ刃^は小^こ
伏^{ふく}滿月丸^{まんげつまる}江^え宇^う稻^{とう}子^こ小^こ抱^{いだ}れ^て。坐^{すわ}置^お御^ごお^て成長^{せいじゆう}。遂^{つい}小^こ母^めの仇^{かう}怨^{うら}復^{くわ}。入^い唐^{とう}の望^{のぞ}叶^は
まれ^る。血^{あか}書^{しよ}と父^{ちち}小^こ渡^{わた}。れ^ると頼^{たの}一^{いつ}追^{おい}五^ご十^{じゆ}詰^づリ。半^{はん}文^{ぶん}庫^{くら}と^と彼^{かれ}血^{あか}書^{しよ}と^と取^と出^だ
て亡^む靈^{れい}の前^{まへ}小^こさ^く置^お且^もあ^れ。我^わ疾^め少^{すこ}貴^き所^しの行^い方^{ほう}と尋^ねひ。其^の書^{しよ}と^と渡^{わた}。進^{すす}
せんと^と思^{おも}ひ。うども先^{さき}勅^{てき}書^{しよ}と唐^{とう}帝^{てい}小^こ呈^{てい}。曆^{れき}書^{しよ}と^と借^{かり}得^とて後^ご貴^き所^しの所在^{しわい}を尋^ね
んと^と思^{おも}惟^す。思^{おも}ひま^まス。夢^{ゆめ}幻^{げん}の面^{おもて}會^あせん^まハ。衣^き紋^{もん}を涙^{なみだ}小^こ沾^{つぶ}れ^る。ハ亡^む靈^{れい}

も愁並うて血書と手ふうて涙を流。我死て怨魂幽鬼とす。切通ひて
古卿の妻の横死兄好根が非義江守稻すが忠貞満月丸が孝心す。心く知りそ
や我ゆき児の紀念少と此國空て詠せ蜂腰と。最期小脇に衣の袖小血書
ひぐ。帰朝たまひ児か渡し給れと袖の中より衣とす出一吉備公の前
へき出一れむ吉備公手ふどう上て又うそ天の原の歌と血没小書うる依く
再三吟ト返し心中小熱と歌の意を考て感慨あり。天晴秀詠うる。是ハ唐主の
月を見て古卿三笠山山出一月と思せられなまべとよまれる小仲丸點首某帰朝
せん。清川ホと明州の港へ到りふ此國の学友送り来リ。餌別の酒宴と催し。詩と
作合をさせ折中秋の月と出と朗うなり。故鄉小ても此月と妻子の日々と
思ひすてほし。愚孫ふて児が文も血と以て書し。我歌も又血没にて書。又子の
血脉今夜回り逢一ぞ不測がれと見て。又雨と落涙一ぞ吉備公も其事と察

実も其吏小我出京の砌り賢息が其父と持參有り。子母錢乃士吏と
思ひ出。脚子息ふと中空へふ隠て今テ親子の血没乃書の環りあ
吏の不測さよまわれど貴卿の先亡あんとハ思ひざれん。帰朝と此紀念を脚子
息傳ふぞ。さよ悲とも怡びもあまよみて。又落涙をと催され。亡靈
涙と搔もひ幼を改め。曰児が義ハらか不足る私吏か。只緊要の一大吏
ち。今百官中小貴卿退出あは後ふて。去宗帝群臣と彼玉兔集と倭國
の使者小借金を。否やと辯議あは。去小倭臣禄山が謂うす。日本ハ土肥黎庶
豊饒の上國と。我唐土の後の患と成。金。猶も日本王書信と越聘
を厚と頼まれる。玉兔集と惜と貸ひ。金を。武勇尖を倭人怒を殺
ふ。此玉兔せん吏も量ひ。臣が愚接ふらむ。倭國空ま渡し。墓と彼

吉備公
入唐
阿部仲呂
の靈
遣ふ



使者が岡せ。墓基が勝て。不得を玉免集と貸す。若勝叟能がぞと貸す。
と贈む。やまと岡墓と知る倭人身て耻て其勝得を知逃帰り。而も
言ふ。唐帝をめ群臣。实もとて基の勝負を決し。對手は四百余川。其
乃名入と呼き。雍州の玄東とり。者ふ定やす。彼玄東は此土の雙父あた基
の上手ある上。其妻ハ右將軍隆梨と。者の女。通じて。諸技を通す。就中墓と能
岡夫玄東。も猶勝る。その名人。彼女夫玄東。付從て貴卿と玄東
との墓を見物し。若玄東危き。吏あを助言して。勝と。を貴卿。お耻辱
然と。せんと。巧をと。いふ。詰も果ざる。小吉備公大。お残れ。其と。身の大吏
あき。倭國。傳つ。がる。岡墓と我争う。知。其墓と岡。どつ。玉免集と貸す
と拒む。ある。岡を負ん。吏。以。我身の進退窮り。至。彼秘書と。水を
得。が。死を異國の土。埋ん。と。覺期。されど。今更驚く。金に。小難れど。の

我死せ。太上皇の御望。叶。且日本。の耻辱。残。唐朝の者。とも。不嗤笑
せん。吏と。抒惜氣と。無念の涙ふれ。仲丸の靈宥。て曰。ま。悔。も。
と。我存告の時。岡墓と。も。覺へ。粗其定石。も。知。且。劫通方。と。以。貴卿。と。助
る。あり。あ。玄東夫婦。妙手。不。と。も。恐。と。不足。唐の宮中。ふて。墓と。
よ。と。望。ま。畏。と。吏。か。玄東と。墓と。岡。と。我公の。彦。身。ふ。付添。墓。歩
法。を。指揮。一。必。と。勝。せ。や。也。夫。岡墓の起源。古舜帝太子商均。智を
生。や。久。爲。少。初。て。墓。と。造。て。教。一。と。や。黑白の。石。日月。小象。リ。縦横。小十九。寸
を。表。と。石。と。圓。く。造。天の。象。ふ。て。盤。の方。も。地。の。象。す。縦横。小十九。寸
引。て。目。の。數。三百六十。目。ふ。え。一。年。の。日。數。を。表。せ。其。間。小十九。の。黒。石。と。白。石。
星。同。と。も。又。と。勢。同。と。も。号。星。同。と。ふ。の。九。曜。星。不。准。む。る。号。ナ。リ。九。曜。數
乃。極。リ。少。て。勢。強。ま。以。て。勢。數。と。い。が。故。小。勢。同。と。号。を。と。も。贈。リ。其。基。盤。の。丈

一尺二寸を表し。石の數三百六十一石は是を一年の日數小准て白石を
陽と象り。黒石を陰と夜と象る。故に黒石と持者先とお月と日を
夜の九つ子の時より始らば以てなり。猪黑白の石とて相向き陰陽應對の
義と。陰陽の應對は他の物と交る更なし。故に側より助言する事と堅く
禁むる。黑白の石各地と取合とん中ふ兩月有と生と云。斤同及び目無を
死とり。是世界天地萬物生死を以て大東とも云。其地と取争を戦
場の戰ひを象り。用すも地の委き方と廻と。少な方と輸と。其年の名ふ歛。
船行盤抑綽閏劫征など。皆戦場の幻を用ひ。誠か罔暴ハ活物は
其變化極り。其機小臨もて變ふ應びの手段千變万化たり。我指揮の
度く。唐主無二の名人と呼ま。玄東なる。何ぞ畏々と不足人や心強く
思ひ。早曉の鐘更くと告う。鷄鳴東天紅を報ぐれ。亡靈

ちサ驚馬一風情。さて今夕辭別や。と。向も。急ち次第。烟の如消失。

唐帝與群臣評議

玄東妻諫良人條

程を。夜あゝと明る。吉備大臣ハ不思議小仲毛の亡靈小逢其憤死の
也。其の懲觴盤石の名。宮中の絢儀の始末。小ゆる追微細小安とり。も
夢とも現も弁へ。覺束かく思ひ。れど。正く天の原の歌と血沒して書
衣の。序袖ハ坐邊。残。満月たの文を無ど。是亡靈我危難と助ん。よ
疑ひあはと心中。頼安く。すひて佛名を唱。仲毛の跡を。吊れる。却説是す
前。華清宮ゆ。倭國の使者が退出せ。後。小。絢儀。安禄山。安。在
せ。其の勝負。一決。火急。雍州の。玄東。召寄。明後。日。倭國の使者と。其
勝負。を。主。金。傳。多。か。ど。玄東。敬。領掌。心中。想道。其。ひ。あ
倭國。厚。と。社。あ。る。倭人。と。其。と。圃。よ。の。勅命。こ。不。審。わ。れ。是。は。ま。き。子

細ある吏さへ。其ハ左さ右の四員殺し知しる倭人しづかにんも勝かつて堂主どうしゆをとり尚安じょうあん一と心中じゆうじゆ小独笑こくわうと宮中みやちゆうを退出とうしゆ。欣幸きんこうして我家いえへ歸きリタ。玄東げんとうが妻め隆昌女りゅうじょうめ朝廷けいせいより俄わざわざ小夫おとこを召めし。何なにか御用ごゆうやと安やすた心こころより良よ人の帰きる待まつる小玄東こげんとう喜悅きえつの色いろを含ふくらむで帰宅きたい。心こころを安やすべ夫おとこを迎むか。奥おくの室むろ小入いり夫妻座定さいじやざてりて後あと隆昌女りゅうじょうめ夫おとこを向むかひ。今日王宮おうぐうより倉率くわうりつ小召めし。如何いかなる御用ごゆう小てひいと向むかひ。玄東げんとう完示わんじとて曰い。先さき你なも悦えびい我わも火急ひきの脚あし召めし何なにか御用ごゆうやと心こころを痛いたら。案あんの外ほかたる勅詔てきちょ小て。今般日本にほんより使者ししゃ小奉めい吉備きびとと者ものと聞き基きとも。小勝こかつて耻辱ちよともす義ぎ。抑おの基きハいまま倭國しづかくに傳つ。且よ小基こき石持叟せきし小あちこあちる倭人しづかにんと基きを聞きもす勝かつ。赤子あかこの腕うで拾あつる。尚安じょうあん一いつ。我わ他の技わざや踠ひしとりとりとも。基き六ろく幼少よしあい時ときより好すきて今いま頗まことに妙所めうしょを自得じとくまれ。吾國ごくに四百余州よしよしゆしゆの中なかても基き

小於こいて、我われ小勝こかつ者もの恐おのれえ有あべす。彼離山かれさんの基き仙せんあつとも我われ小こ勝かつ得とく。也よ基きを知しる倭人しづかにん小於こいて、船ふね小向むかひ二十じゅう年ねんおおざる内うち小勝こかつ君きみの脚感あかんふ願ねがり御賞物ごしょうものと頂戴てうだいせんと掌てを指さす。也よ基きもあつぶ言ことを。隆昌女りゅうじょうめ坐すわて少すこ時とき沈吟しんぎん。傍そば小向むかひ五音ごおん夫おとこ聞き基き小達こたつ。今般にほんの役わくを奉まつり。也よ家いえ名譽めいよとハはナなふふ倭人しづかにんと基きの亡なき輸ゆを競くわひ。脚身あしふみの大吏おうじから兵書ひょうし。也よ小敵こどと慢まんぐ。也よ倭人しづかにんと誠まこと。日本にほんハは小國こくかとゆども古いより入唐にとうせん人じん。也よ智勇ちゆうの人ひと傑き多多く。也よ神國じんぐくかとゆども古いより入唐にとうせん人じん。也よ基きの法傳ほうぢん。也よ神じん不測ふそくの妙術めうじゆ有あて。基き盤ばん小臨こりん。自金玉じきんぎょく半段はんてんと知し。也よ基きあつま素そり。也よ多多くの人の中なか。也よ擇えらひ出だれて渡唐ととう。也よ三事さんじゆ當あて。也よ人ひとす。也よ小もがれこがれ。也よ帝深みことひく重うい。也よ臣下しんか。也よかと高たか宜ひと授まけ。也よ度たどり。也よ

使も其才機靈小勝きト人あるべト。方一廊身一石尔てもお肩すすめある。其身
乃耻辱のまふす。四百余川の耻なり。悔らへ周々辞退しむ。生まる事よと言ふれ
テ東嘲り。女心ふ。左程す。お倭人を恐るべからず。我ハ敢て是を恐れず。先
も文学武藝を競よ。勅余か。時宜ふ。うて辞退す。を。餘れ。其碁と
知らず倭人と其碁と用ひよ。王余あれど。三才の小兒く。うと。何ど辞退す。ま。况
や我國碁ふ。妙と極め。叟と知召て。勅紹あれ。争う。辞退。不及。むんや。你ヨタバ
心が旁もう。叟勿乞。す。あ。孫も碁ふ。於て。普通の者。小勝。ま。試。ふ。一石。お。て
見ん。と。碁盤。碁笥。と。取出。夫婦。盤。ふ。さ。向。ひ。隆昌女。ハ。黒石。を。取。て。先。を。うち
一石。二石。と。互。石。を。下。ま。う。如何。え。隆昌女。が。下。ま。三石。や。の。黒石。忽ち。三ツ
小割。ま。是。お。依。て。再。黒石。を。把。ま。て。す。是。も。下。割。ま。わ。ど。隆昌女。眉。を
顰。ま。怪。ひ。ま。一石。か。ご。二石。や。ご。黒石。の。割。ま。甚。ご。凶兆。か。と。言。て。手。を。止。め

て深く怪しきと。玄東にてお笑ひ石の割る吏今ふ限も何を怪ひ不足ん
や。取換ておぎよと言ひども妻、頭を振否左ひいをと允甚、天地陰陽の
理を。あ黒白の石と交へて六陰陽互ふ崩。一陰一陽巡つて一年四季を成。小
象も。されば石は陰陽あり黒白是なり。又數ふ陰陽あり。一ハ極ふ多リて
陰陽のまざれを。七百二四六八を隅にて陰なり。ニ五百七八九八奇ふ。陽ふ
か。今ア第三石同の陽數ふ當て陰体の黒石の割。一陽より陰を破乃理也
ア。慮ふ日本小國となり。此中華より東ふあるて陽國なり。吾此國を
大國われども倭國より西ふ當を日本ふ對して、陰國なり。陽の數ふ第三陰
の黒石の割。或以て考き。今度倭人と其の勝負と競争す。然ふか。之
をもがれ前表ナリ。併せて愁の色と面ふ見られ。玄東大いふ氣色と損
ひ。馬了たヤ條。か心被た女の量見より我曠勝負の先と折吏勿ミ夫。

か疑り遂に万吏皆疑ハく。其者たる是を狐疑とひて織者ハ卑
笑へ。由あた一言かて我心の勇氣と撓へ。甚ざ不興。基をお止て酒を
嘆。稍酒氣を帶て玄東、卧房ふ入り。妻の隆昌女ハ黒石の二石ある。害
ふ心頭を煩。枕ふも着を百般ふ工夫をこ圓ら。なるも其夜も早く明
されば玄東起出で何星と參内の準備をあらまか。唐帝より勅使事跡明
日宮中ふ於て倭國の使者と圓基の勝負と競争。されば早天より參内を命り
テ渡。玄東がぞ玄東護んで領掌。勅使を見送り沐浴して待程。其日暮
て當日からかく未明より朝服を着し。冠帶を浴て綺羅と飾り馬小跨
リ從者と將て意氣揚々と手綱搔縲。王宮をさへて急駕。隆昌女ハ良久
今日の基の勝負と心ふ危。其身を潛で宮中へ参り。所縁ある宦女と頼む。基
の席の給仕の女官ふ立雜り。りく。玄東危く。是と助ん者と心中お思ひ絶け。基の

始ろ。代相待。前郎婦の志。どせう。うううう

吉備大臣

与玄東園基

隆昌女

隠

黒石

吉備公

仁恕

時小唐朝の開元二十年十一月十五日華清宮の内なる長元閣の中央ふ基の席を設
正面の錦帳の内小ハ玄宗皇帝。金銀珠玉を鏤らたる椅子ふくる。悠然として基の
勝負と見物。帝の左右小ハ皇后楊貴妃と始。宮妃女宦綾羅錦綉の
袂。雀國輔以下の大臣堂と列座。傍中央小ハ安禄山楊國忠。嘉舒觀張九
龄。盛す。推朱の基。白石百八十石。盛て基盤の上小飾。白石を白
洲濱と。海岸小產。白石を磨。銀泥を以て塗。黑石。昆侖山小產。昌
命石を磨。金泥を以て花鳥と。時繪。一石と一環の玉。石と比。珍石。斯て帝宦人小余と。使吉備大臣を繕。めら。小程。吉備大臣

人ヒト小コトハ誘アシテ引スルせレれテ入ミテまスる。其衣冠コトハ小コトハ黒漆マツリの冠コトハ威カタマリ高タカシく頂タケルた繫ミクニの纓ハシモを長ロハく結スルまスがえルれルあリ。下シテ深紅シモニ乃シテ小コトハ神ミコトの上アマニ小コトハ浅紫シモニの衣コトハと襲スル顯アシテ紋モチ金カネ糸スレの狩衣サムライ小コトハ碧玉シモニの石帶シモニと締スル金カネ造スル乃シテ太刀タケ佩スル及シテ。徐シテくと歩ムて殺スルけの椅子イサキ小コトハ云フミテ去スル宗帝ムニシタ小コトハ禮リを施スルまスる。安祿山アシラム進スル出スル日本王ニホンノミコト金鳥王キントリノミコト免スル集スルと借需スルを足シテ下シテ小コトハ頬チ乃シテ書シテと持スルて此唐土シタタタヨへ差越スルをシテれド。彼書ハ我君家ハ代スル深秘シモニの珍書シメシあれバ容易シモニ小コトハ他國タタヨへ借スル。然ド日本王ニホンノミコトの需スルをシテ黙止スル。我國ハタケヤマの碁シと号スル一藝ハタケヤマあリ天文タツミン地理リ小コトハ基スルづシテ作殺スル。戲ハタケヤマ技ハタケヤマ足スル下シテ。我國ハタケヤマの者ハタケヤマと右ハタケヤマ碁シと圓ハタケヤマと能スル勝得スル。其功ハタケヤマ小コトハ免スル。玉免ハタケヤマ集スルと貸スル。勝ハタケヤマ吏ハタケヤマ能スル金カネを貸スル。如何ハタケヤマ碁シと圓ハタケヤマや否ハタケヤマとシテ問スル。吉備ハタケヤマ公ハタケヤマ心中ハタケヤマ小コトハ果スルして亡スル靈ハタケヤマ。告スル小コトハ達スル。思ハタケヤマひハタケヤマあリがハタケヤマ。さハタケヤマわハタケヤマね休スル。合スルられスル。是ハタケヤマハ思ハタケヤマもよハタケヤマぬ難題ハタケヤマ。碁シとシテ義ハタケヤマいハタケヤマふ日本ニホンへ傳スル。不知ハタケヤマ技ハタケヤマを為スルんやハタケヤマあリ。さハタケヤマもあれ戯ハタケヤマ技ハタケヤマとシテ矣ハタケヤマ。

席上の遊藝かて先生小拘の技あり外るが。先碁とせんを試みて我小さんせ
ゆく見して其法小做ひ碁とすいがとやされまき。安禄山心可笑一度二度する
とも争う碁を圍む法と観るがよひ。あ、膳と拉はれんと青年の内宦兩人と
呼出し。你亦此席坐て碁を圍み倭人ふ見せよと指揮を内宦領掌にて兩人盤面
小相對し。黑白の石と把てど碁とす。張九齡吉備公ふ教て曰。凡盤面ハ世界小
象り。戦國小州郡と取争が如く。地の多れを勝と少れを負とす。彼と勘と云是
然除とひ。彼と勘とひ是と圍とりと内宦寺小徒ひて頃じめ銳史と内碁ハ黑
て地を造ふ白石の方七石の勝と咸り。吉備公熟と見終りて安禄山に向ひ碁乃
て法會得いせり。進入するもあれ對手と出でゆと望まれるほど。安禄山心中ふ嘲
りとて。宦人ふ令して玄東を呼出させられ。声小應じて立出る。玄東が甘旨の笑



東の羅綾の衣服の上ふし雀毛を纖へ袍と穿ち白玉の石帶を高く結び倫社
を頂て手小象牙骨の扇子を携へ徐々と歩き出遙未席の普免が安禄山を下
向ひ。只今此席にて倭國の使者と碁盤が用ひ、倭唐の曠勝負もまた半らんでも
肩もとたは我唐朝の耻辱なり心咎責て不覺をとる事又かれと誠多ふど。玄東唯くと
領掌す。玄宗帝が拜礼へ領て碁席の椅子ふうと吉備公が礼へ。吉備公も
答禮あり。雙方碁笥司とて手を東へ主事を黒石を把吉備公客されし白石を
とくらむ。其時女宦們珠玉の器物小珍菓を盛て捧げ出玄東が妻の隆昌が
も香湯を温くる瑞璣の瓶を拵て立出給仕する体ぶて碁盤のわたりは在り。勝
負如何と瞬わせどかうめ居る。又吉備公の側より件たの亡靈影の如く姿と現して
守護者とす。口吉備公の目あく見え。満座の人々の眼が見えざるを。時小玄東
肚肉が思ひ。倭人を寃せて猿智かる者と皮む。我お名残りて涙又我真似
を仕内へす。小手す。なあを。依て真似の出来まる妙手とおもへと心巧みと
黒石を把碁盤の中央なる星の上小丁どあられ。吉備公少時勘考あくと白石
とく。玄東がむかう黒石の上へ重ねてぞおまくる。傍小見物にて居る唐の臣下
是をみて思ひ。吹出し。唾とこくひかる。中やも安禄山。出石へます。小重ねてもう
物があふ。其ち小児の戯とせらるやと嘲弄。吉備公色と正し。我も重てう
物あふ。知る。先小盤ハ世界だ象きと承られ。故を碁盤ハ世界の大財小
と。唐土とれ。盤面四百余州。又日本とも。時盤面六百余州。大也。也。
今對手盤面を唐土。我ハ又日本とす。然る小對手盤の中央小玄宗皇帝の御
位の石をむかへ。我日本の聖武天皇の御位の石をむかへ地。故小唐土帝もお
位の上小日本天子の位の石を置けたりと些とも恐ろく色かくやされざるほど。安禄山
及と言ひ。口を噛んで閉口。其余の北車も吉備公の大膽不敵の一言小核へ。言を並

ある者もなく。宮中閑寂として皆く鳴と鎮まる。玄宗帝甚しき感トタハ倭傳
一言理の至極たり。四方か使して君命と厚めやどと。是ホの人を謂也。國家の事にて君小事する者ハ先斯ニと旨くされ。夫ハ易り玄東ハ對人ハ曲其事と知らずと欺き。由
あれ石をもて五國の耻辱と引出せ。早く石を引て正しくおと陽城有る小を
玄東大り恐き赤面して黒石と揚れ。吉備公も白石と引き。玄東改めて先を
盤の厅隅か初石を下され。吉備公も半前の隅へ初石を下。是より互に思慮を
凝して一石ニ石と半程小石の勢ひ巍く連綿として星の列るが如し。是仲九の七靈
吉備公余助言ある故ナリ。其声其姿ハ一座の人々の耳にせず眼ふえず
な。僕人を其事と知りと思ひ。玄宗帝と者は見物ある北車士呂備公の石立を見
て驚嘆せをと。者も増て況や慢り切。玄東ハ案小相違して對人小内を先
をむき心中大不殊た額か汗の玉を下す。断んとおぞ切きと腰を剣を抑除を

也。初通自在の亡靈の指揮あらず。同半石ノあざ手なり。互小五六石の端石を下す
基石ハ已ふ未一段と成る。隆昌女始より給仕小吏よし。双方ノ石立は同く脚を長
居する。吉備公の石立悉く法合ひ機變の妙手夫玄東も及ばざる術矣
を大不殊。口の中まで同善する。玄東ハ二石肩の体され。是ハ朽惜やと思へど
助言する吏も能ひ。手か汗握つて見る内。基石早終りて船竿及嗣駄目を埋ふ
隆昌女堪。吉備公の取て一黒石の端間を石盃と取紙つて暗小吊入。呑じ
る。令人を知れど併れの亡靈ハ其と知て吉備公も知せぬも如何思れ。尚不知貞不
て地を造られ。双方の地三十日づ有て對基となす。互勝負公さう。実ハ白方
一石の勝成る。隆昌女同善して早く夫の肩と知黒石つれ衣隱。是の對基
成る。一座の君臣惆悵。奇あるも妙なる哉。いふ倭國傳。さう。且ハ貞人
て其法を。かほく。唐。一言へ。くる。玄東と地基を。お一夷不測。かく。對基

實も倭人を神の應護あるとし。又モ虛説あると或ハ感ドヌ恐をふすも有タ。即
双方石を取め内官の青年基石を奪へ改むる。小黒石一ツ不足タ。飛散とがち。其
あつと尋ま。搜せども更不^{あつ}。若袖中入へわやとて。士官備公を東と先。坐おき。小見物
て居る人。列佐袖を身に懷中で搜せども首^{くび}て無リ。是れ。内官们首を疾め。是
ち不測の事。始^{はじ}め築^{つき}。時ハ黒石百八十石有余。小畢^{こひ}小臨^{こり}。而一石不足有^あ。至^{いた}
祇^し儀^ぎ區^く。吉備公^{きびこう}仲九の亡靈^{おとぎ}の告^ご。而^は黒昌女^{くろまさめ}が呑^の隱^{かづ}。是れ。知^して^みる。其とも
外もれと狼余向^{むか}。斯^すまで尋^さ搜^め。小石の無^な。察^さら^う。小多^{すくな}の石かれを^あ持^も。其とも
る也。今^は捨^す却^すと仰^あ。雀^雀國^{こく}輔^{すけ}頭^{とう}と振^ふ否^い左^さ右^う。此基石^{きせき}。帝^{てう}の重器^{じゆき}で
尋常^{よのひ}の石^{いし}。一石^{いっせき}と^いも等^そ。用^{もち}捨^す置^め。且^{また}又黒石今^は一石^{いっせき}。左^さ右^う。其^{その}の^とも
唐^{とう}土^どの肩^{かた}と成^な。石^{いし}を捨^すて穿鑿^{うが}せ^ま。と。倭^{しづか}國^{こく}帰^かりて沙汰^{さと}ある時^は。吉唐^{よしつか}
乃^お耻辱^{ぢぢ}あれ。決^すして捨^す置^めと言^ふ。小^こを宗^{むね}帝^{だい}食^く雀^雀國^{こく}車^{くるま}所^し理^り。是れ。

此席^{ひき}小列^{すく}者^し玄東^{げんとう}が肩^{かた}を隠^{かざ}。一石^{いし}を懷中^{いなか}に隠^{かざ}。其^{その}を^も捨^すかんて倭^{しづか}
の^の娘^{むすめ}を受^{うけ}。金^{かな}に^{うけ}。其^{その}を^も連^{つづ}衣服^{いふく}を脱^ぬ。其^{その}を^も穿鑿^{うが}せん。礼^{れい}儀^ぎを乱^{まし}。其^{その}を^もあく^{あく}れを
石^{いし}を^も搜^め出^だ。其^{その}を^も古^いの扁^{へん}鵲^{けつ}が傳^つ。彼^{かれ}照^あ病^び鏡^{きょう}を取^と出^だ。此席^{ひき}小在^{すく}者^しども乃^お
懷中^{いなか}に^{うけ}。其^{その}を^も勅^{てつ}紹^しあ^つる。小^こ依^よ官^{かん}入^{いり}奉^{まつ}。急^{いそ}小^こ宝^{たから}藏^{くわ}。其^{その}件^{くだん}の名^な鏡^{きょう}を取^と出^だ。來^{くわ}
リ珊瑚^{さんご}の鏡^{きょう}臺^{だい}。小^こ居^ゐて宮^{みや}中^{なか}ふ飾^{かざ}り。其^{その}照^あ病^び鏡^{きょう}と^とる鏡^{きょう}ハ元^{げん}天^{てん}堂^{どう}より傳^つ未^せ
宝^{たから}鏡^{きょう}。玄^{げん}二尺^{二寸}。裡^{さか}九曜^{くよう}破軍^{ぱぐん}二十。宿^{しゆく}を鑄^{つくる}。表^{おもて}の如^く光輝^{こうひ}。鏡^{きょう}の面^{おもて}
向^{むか}。者^し衣服^{いふく}襲^{おそ}。束^{つか}。其^{その}五臓^{ごろう}六腑^{ろくふく}。其^{その}透徹^{とつてつ}。而^は其^{その}裏^{うら}。亦^{また}透徹^{とつてつ}。而^は其^{その}外^{ほか}
の宝^{たから}鏡^{きょう}。其^{その}扁^{へん}鵲^{けつ}。是^ぜを得^とて病^びある者^し。鏡^{きょう}面^{おもて}小^こ向^{むか}。其^{その}病^び何^う。其^{その}臓^{ろう}腑^{ふく}有^あ。而^は
照^あ見て治^な療^りせ^ま。其^{その}奇^き特^{とく}の靈^{れい}鏡^{きょう}。氣^{けい}代^{しろ}の帝王^{おうしやう}傳^つ。今^は座^{すわ}。布^ふめ。而^は
とあり。九重^{くじゅう}の寶^{たから}。其^{その}深^{ふか}。而^は其^{その}寶^{たから}藏^{くわ}。其^{その}置^め。至^{いた}宝^{たから}。其^{その}病^び。其^{その}臓^{ろう}腑^{ふく}。有^あ。而^は
隠^{かざ}。全^{ぜん}を^も穿^{うが}。其^{その}所^{ところ}。斯^す取出^だ。是^ぜ小^こ依^よ。玄^{げん}東^{とう}を^も首^{くび}。一座^{いちざ}の^と草^{くさ}。

鏡小向不衣服懷中ハリ不及腰中の臍腑まで残る隈もなきとて微リカク小向
程の者奇異の思ひをあますとく者か。茲ども基石と見れた物せんえむたは
より内宦宮女ひるまで一人々檢者を受て立退今ハ隆昌女一人と成る。隆昌
女ハ素り石を衣隠せらる。鏡小向ゾ忽ち吏露頭。我身ひりも更たり夫を東
まも連座の罪小陥り。夫婦とも市小刑られんと思へ。氣脇一身脉戰栗顏色
如茶子令恐怖の色をと表。安禄山ハ隆昌女と玄東が妻なりと知れん。彼が
猶豫も成紛り。ゆも始より碁盤のわと小居れど。疾く鏡小向。よとせり。小士備
公と隆昌女が石と隠せ。吏を知り。深た子細あら吏と察す。其罪の露頭せ
吏と恐き色をみて。心中小憤。安禄山が者。先刺す種々基石の穿鑿ある。倭
國アラヌタ慮り。ゆひて。吏あざ。己ナ人名鏡小向ひ。ひても移失せ。石の見え
上ち愈益猥りあり。女人の基石を隠さざる。女性ハ別れ。キテ。品。吏
上ち愈益猥りあり。女人の基石を隠さざる。女性ハ別れ。キテ。品。吏

も有りのあれ。鏡小向。を厭。も無理。も。今ハ省。得。ま。を。有。れ。い。も。安禄
山承引せ。そぞ否。緒。人。皆。鏡小向。ふ。此。の。鏡小向。が。疑。向。ひ。も。怪。し。義。
を。吏。海。空。疾。く。鏡。面。小。向。と。言。屬。く。声。を。隆。昌。女。耳。ふ。百。千。の。効。を。串。く。
如。く。空。え。窟。ナ。王。の。廳。前。す。淨。破。利。の。鏡。小。向。罪。人の。苦。も。我。身。ふ。思。ひ。と。無。られ。眼
前。小。呑。隠。る。黒。石。を。見。蹠。ま。と。知。あ。る。爲。方。なく。恐。る。鏡。小。向。ふ。明。る。や。妻
明。月。の。ぐ。衣。服。の。裏。だ。透。徹。り。五。臓。六。腑。も。隈。カ。イ。字。る。わ。ど。身。の。毛。も。堅。て。恐。く
支。退。を。ま。と。安。禄。山。襟。搔。撫。て。動。キ。と。眼。と。睚。て。能。く。入。れ。だ。隆。昌。女。が。胎。中。ア。上
腕。と。中。腕。の。向。ふ。絹。小。色。如。た。黒。く。圓。き。物。或。ハ。屏。リ。或。ハ。降。る。か。ど。安。禄。山。太。声。小。果。て。此
女。基。石。を。呑。隠。ー。ん。胎。中。不。經。物。あ。と。呼。る。か。ど。隆。昌。女。ハ。不。及。を。す。玄。東。御。天
針。の。席。小。坐。する。心。地。ー。る。古。備。公。鏡。面。を。見。て。安。禄。宗。向。ひ。足。下。の。自。鑑。達。ひ。す。此。婦
人。の。胎。中。不。黒。く。圓。た。物。昇。降。する。形。ち。碁。石。似。ぬ。も。左。か。あ。う。是。ハ。正。く。燒。姓。

せりと覺ゆ。縮小色一如く見ゆ。則ち胞衣ナリ。彼胎家未分鈔。小婦入懷胎の始。夫の
精液母胎に入を。其形も圓團にて。其色黒也。是故阿羅印と号す。七日七夜不て變
むる。或阿浮雲と号す。と有今婦人の胎内小又ある物ハ子腫小相違。存づ。す。まんね
覺多身も鏡小向。更を厭れ。ハ懷妊せり。と耻も義也ん。女之子腫ど宿せ。常乃
更ふて。あひ耻も。更うハと微笑。笑て。やまれ。な。隆昌女ハ吉備公の仁心骨身。小徹りて。
とがく喜涙小袖を沾。安禄山ハ懷胎の論と信せ。す。も。女。石と。呑。隠。せ。小一決す
時ハ玄東が肩と。義。心付。吉備公の議論。小任せ。基石ハ。義。違。かたて。守。鑿。金の義を
後日の沙汰。か。と。更。落。着。し。名。玄東。隆昌女ハ毒蛇の口と免。ま。心地。怡。更。限。正
時。小玄宗帝吉備公。小玄。吉。基。基。勝。肩。互。角。免。を。双方。得。失。先。今。月。ハ。旅。館。帰
られ。ハ。書。の。義。ハ。糺。議。の。上。手。て。更。と。定。じ。と。宣。ひ。ま。る。エ。吉。備。公。承。伏。あり。て。宮。中。と
退出。鴻。芦。館。帰。られ。を。諸。大。臣。玄。東。夫。妻。も。皆。脚。暇。て。洽。ア。各。王。宮。と。下。け。

